

ひとりの女性のココロの成長と「生」と向き合う姿を描いた、 力強く希望にあふれる物語。

『どうして生きるの?』じゃなく、 『何がなんでも生きなきゃいけない』

Introduction

『Mayu-ココロの星-』は、実話に基づいたストーリーである。21歳の竹中まゆが、ある日突然、直面した現実。『Mayu-ココロの星-』は、困難に立ち向かうひとりの女性の、ある一年のココロの成長を描きだす。どんなときでも、しっかり前を向いて、逃げることなく真正面から現実と向き合うまゆのまわりには、いつも大切な家族、友達、恋人がいる。青春まっただなか、立ち止まってなんかいられない。まゆの成長は彼女ひとりの成長ではなく、まわりをも巻き込んで希望の光の道しるべとなる。

病と向き合ったとき、どう“生きる”べきなのか。『どうして生きるの?』じゃなく、『何がなんでも生きなきゃいけない』……だからこそその苦しみ、葛藤。それがあからこそ生まれる楽しみ、小さな幸せを見つける喜び、感謝の気持ち。乳がんという病気を主軸にしながら、本作で描かれるのは“生きる”こと。まゆの凛とした生き方はスクリーンを超えて、観る者全てに勇気と希望と強さを与えるだろう。夜空にひととき明るく輝くポーラスター〜北極星〜のように。



だれもが応援したくなる ヒロインを平山あやが熱演

Cast

ヒロイン、竹中まゆを演じるのは、タレント、女優として幅広い活躍を見せる平山あや。北の都市、札幌を舞台に、生きる希望を決して捨てることなく気丈に病に立ち向かい、前向きに生きるヒロインを熱演。彼女のけなげさ、凛とした強さが、作品全体に明るい光をもたらしている。テレビのバラエティなどで見せる顔とはまた違った一面を出した演技で、ヒロインまゆを演じる。

また、まゆを温かく見守る家族―自身も卵巣がんという病を抱えながら、娘まゆの理想の女性像である母親役には浅田美代子、娘を優しく見守る父親役を三浦友和が演じるほか、まゆの恋人役には池内博之、元カレ役には塩谷 瞬ほか、新旧実力派が脇を固める。

もし21歳で乳がんになったら―。
ひとりの女性の生き方が
「希望」と「勇気」と「強さ」を贈る―。

がんが私に気づかせてくれた。 本当に大切なもの 家族、友達、恋人 そして、夢はいつかきっと叶えられることを。

Story

札幌市内の広告会社で働く竹中まゆ(平山あや)。小学3年生のときに母が卵巣がんを発症。それ以来、入退院を繰り返す母に代わって、父とともに家事をこなし、4人家族の竹中家を支えてきた。そのときからだろうか、まわりからは、“いつも弱音は吐かない、しっかりもの”と思われている。

あるときふと、胸の脇にゴロゴロしたしこりのようなものが触れるのに気がついた。まだ若いし、乳がんなんてあり得ない。20歳前後の乳がん患者は統計上0パーセント、それなのに…。「9割の確率で悪性です」医師からの容赦ない乳がんの宣告。

「先生どんなにつらい治療もがんばります。でも私、いつか好きな人の子どもを生みたいんです。その可能性だけは残してください」

それから、まゆと乳がんとの闘いが始まった―。

♪主題歌はDREAMS COME TRUEの「何度でも」



女性の乳がん死亡率ゼロを願って。

乳がんは乳房のミルクをつくる乳腺にできる悪性の腫瘍です。日本でも増加の一途をたどっており、40歳代で増加し始めます。しかし、乳がんはごく早期で発見すれば、95%が治癒する病気といわれています。

『Mayu-ココロの星-』には、ひとりでも多くの女性が乳がんやピンクリボンについて興味をいただき、乳がんの早期発見、早期治療を。との願いが込められています。



ピンクリボンは、乳がんの早期発見、早期診断、早期治療の大切さを伝えるシンボルマークです。

このピンクリボンマークはピンクリボンフェスティバル(朝日新聞社など主催)のマークです



Mayu
まゆ
—ココロの星—